

サクラクラカツミさん

●パフォーマンス・アーティスト

みんなと「違う」は、誰にも真似できないこと
それを生かせる環境と人間関係をつくってほしい

いまや世界に認められるパフォーマンス・アーティスト、サクラクラカツミさん。武道の動きを取り入れ、映像とパフォーマンスを融合させたステージは見る人を圧倒する。集中すると周りが見えなくなる特性があり、「自分は普通じゃない」と不安を募らせていたが、ありのままを認めてくれる存在に助けられてここまでできたという。

●取材文……太田美由紀（ライター）

熱中できること自体が
素晴らしいこと

「小中学校の成績は、図工や美術だけ5で、あとは1と2ばかり。体育の授業も運動会も大嫌いでした。友達もいなかったの、学校から帰ってきたら遊びにも行かず、集中すると水も飲まずにずっと家で絵を描いたり粘土で動物を作ったりしていました」
テストはいつも100点満点でひとケタか10点台。家に帰って両親にそれを見せて

も怒られることはなかった。勉強しろとも言われない。ある日、前日に描いた絵を完成させたくて「お腹が痛い」と嘘をついた。母親には全てお見通しだった。

「あの絵が描きたくて学校休みたいたらもう言わないといけないよ。お腹が痛いなら、何を食べさせたらいいかなってお母さん必死に考えなくちゃいけないんだから」
それ以降、絵を描きたい、粘土の続きがしたいと伝えるようになったら、母親は学校を休ませてくれるようになった。母親はい

素晴らしいことなのよ」

学校でのことはほとんど覚えていない。授業中は、ただじっと座っているのを我慢するだけの時間だ。中学生の頃、グラウンドの木を植え替えている様子が面白く、教室の窓から夢中で眺めていた。先生に何度も注意され、すぐ後ろに立たれても気づかないほどだった。クラスの同級生はその様子を見て大笑いしたが、先生はそんなサクラさんにこう言った。
「将来、お前は大物になるかもしれないな」

その言葉はサクラさんの心に刻みつけられ、いまでも大きな支えになっている。

自分が突き詰めたことなら
力を発揮できる

学校を時々休むもうひとつの理由として、病気がちだったこともある。体は細く小さく、からかわれることもあった。
「病弱だし何をやってもうまくできないので、父が心配して5歳くらいから自己流で空手を教えてくれました」

「カツミがどれだけ頑張ってるよ。人と比べて、あの人に勝てない、この人に勝てないと言っていたら一生そう言い続けることになる。他の人と比べるとは間違っている。

Profile

●サクラクラカツミ●

1963年、愛知県生まれ。1999年 Eiko と共にダンスパフォーマンスチーム ORIENTARHYTHM を結成。日本の伝統文化が持つ特異な「動き、リズム、精神性」を総合芸術「藝武」として創作。ラグビー W杯2019 日本大会の開会式ほか、これまでに41か国から招聘されパフォーマンスを行う。2022年には内閣府主管の Cool Japan Matching Award2022 マッチング賞を受賞。国内外の講演会などでも日本の素晴らしさを世界に伝えている。

それまでの自分自身と比べなさい。もうダメだと思ったら、『これがお前の限界か』って自分自身に聞いてみるんだ」

いつもは面白いことばかり言っていて楽しんでくれる父親が真剣な顔で難しい話をしている。よく分からなかったが、その気遣はしっかりと伝わってきた。

次の空手の稽古でも腕立て伏せは29回目で潰れた。父親に言われたように「これがお前の限界か」と自分に問いかけてみた。「そうしたら、そこから3回もできたんです。もう、驚いてうれしくて、泣きながら走って帰って、玄関開けるなり『3回できた！』って叫びました。親父が泣いたのを見たのは後にも先にもそのときだけです」

自分が突き詰めたいと思ったものなら、もうダメだと思っても、自分にもう一度問いかければさらに進める。力が発揮できる。その経験は確かな自信になった。

「いま着ているこの服も、パフォーマンスで使う衣装やプラスチックの造形物も、私は全部自分でデザインしています。高校では空手部に入室し、子どもの頃好きだった絵も粘土細工もやめて、空手に集中し全国大会に出場しました。勉強はできなかつたけど、全国大会に出場したことで、推薦で

カクラさんを見て、こう言った。

「日本にはかつていい文化があるのに、どうして私たちの文化を真似しているの？」それは衝撃の言葉だった。ハッとしたサカクラさんは、数か月アメリカに渡り、空手の型やヌンチャクの技をストリートで見せながら、海外に通じる新しいダンススタイルを作ることになった。

そうして作り上げたのが「藝武」というスタイルだ。30歳の頃から模索し続けてきたが、日本のダンスシーンでは認められない日々が続いた。

ようやくブレイクしたのは47歳の頃。動画サイトに自分のパフォーマンス動画をアップすると、フランスのテレビ番組で取り上げられ、そこから一気に世界に注目されるようになっていった。

ありのままの自分を 楽しんでくれる存在

30代半ばになり、芽も出なければ、パフォーマンスの仲間たちは一生の仕事とすることを諦め始める。しかしサカクラさんは、諦めることなくチャレンジし続けた。そこに迷いはなかった。

サカクラさんを支えたのは、自分が夢中

大学にも進学できた。その後、空手からボクシングに転向して、卒業ではそれぞれのパンチの違いを研究したら、ゼミの教授が面白がってくれ、卒業できました」

仕事を転々として たどり着いたダンス

大学在学中は就職活動もせずにとっスパーリングの日々。卒業後、みんなから選んで自分の好きな洋服のブランドで求人を探し、偶然見つけ応募すると、合格した。

「仕事の内容を1日見学したけど、これはやりたいことじゃないなと思ったので、『ちよつと違うので辞めます』って伝えて入社1日目に辞めました」

仕事も、自分が納得できることしかできない。その後もいろいろな仕事をした。ファッション系の縫製、ホテルのフロント、料理人、自動車の板金塗装工——。仕事はすぐに決まるが、続けられない。半年以上続いたのは板金塗装工だけだった。

「残念ながら、その会社もすぐに潰れてしまいました。20代の半ばからは、母がやっていた喫茶店で働きながら、フィットネススタジオで体を鍛える日々でした」

両親は、大学卒業後もそんなサカクラさ

になれること、そして、伴走し続けてくれた妻・のりこさんの存在だ。

「私は今でもATMでお金も下ろせないし、頼まれた買い物も間違える。彼女はそんな私と正反対で、なんでもできる優等生。だけど、ありのままの私を面白がってくれるんです。認めてあげるとか、かわいそうではなく、違いを楽しんでくれる。それが彼女の素晴らしいところです」

サカクラさんが正式にADHDとASDと診断を受けたのは46歳のとき。そのとき、医師には「会社員なら薬を処方するレベル」と言われた。しかし、医師は、いきいきと充実した毎日を過ごすサカクラさんに薬を勧めることはなかった。

「私は周りの環境と人間関係に恵まれて自分を生かすことができましたと思います。発達障害で苦しんでいる人がいたら、その人自身を変えらんじやなくて、環境や人間関係を変えていけばとても楽になるはずですよ。みんなと同じことをしなければいけない環境では叱られ

んを温かく見守っていた。5年前、子どもの頃の話を母親に聞いたとき、初めて知った話がたくさんあったという。

「学校を休ませていると、とんでもない子になっちゃうよと周りのお母さんたちからずいぶん言われていたそうです。息子がどこか『普通じゃない』と心配しながらも、私にはそんな心配も感じさせず、とことん好きなことをやらせてくれた。本当にありがたかったと思っています」

就職先もうまく見つからなくなってきた20代半ば、フィットネスクラブでダンスを習い始めるとメキメキ上達。インストラクターから、「きみは教える側になったほうがいいよ」と声を掛けられた。初心者だったが、ダンスは面白い。

間もなくミュージックビデオで見たステップを独学で真似をして、教えるようになり、ヒップホップのダンスインストラクターが、熱中できる仕事になった。

「その頃の私は、黒人文化に憧れ、真っ黒に日焼けしてドレッドヘアにして、オーバーサイズのTシャツを着てその気になっていたんです。でも、来日したあるアーティストに言われた一言が私を変えました」

来日した黒人の有名な女性ダンサーがサ

てしまうかもしれない。でも、みんなとは違うことが素敵なことでもたくさんあります。違うことは、言い換えれば誰にも真似のできないこと。そこをよく見て伸ばしてほしい。一緒に楽しんでほしいと心から願っています」

何度も仕事を変え、自分に合う環境を探し続けた時間もあつたが、「この仕事は違う」と感じ、行動し続けたことがいまのサカクラさんをつくっている。子どもたちは一人一人違う。その子はどう見えるか。その子の環境をどう見るか。私たちの視点が問われている。

